私の教育実践　～心に残る言葉～

愛媛県立みなら特別支援学校　校長　松本　幸恵

若い頃の私の夢は、「退職するまで『いち担任』でいること」だった。運営委員や管理職なんかにならず、子どもたちの一番近くで、一緒に歩んでいくことが夢だった。それはかなわず、半分近くを管理職や教育行政の立場で過ごすこととなった。でも、今振り返ると、どの仕事もものすごく貴重で、とても楽しかったなと思う。５年で５か所を転々とするという、なかなかあり得ない人事異動にも遭ったが、その分たくさんの出会いがあって、あちこちでかけがえのない思い出ができた。そんな中で、私を支えてくださった大勢の方からいただいた言葉は、一生の宝物だ。私の心に残っている言葉の一つ一つを思い出しながら、教員生活を振り返ってみたい。

誰かがやらなきゃならないなら、松本がいいと思うよ（指導主事時代、元同僚から）

県教委への赴任が決まって、「なぜ私が？」と嘆く私に、同期の先生が掛けてくれた言葉。「ああ、そうか。人にはやりたい仕事だけではなくて、求められる役割というものがあるのだな。」と気付いた。現場を離れる寂しさから気持ちを切り替えて、頑張ろうと前を向くことができた。

人に任せることを覚えろ（指導主事時代、当時の課長から）

私は、なんでも自分でやろうと抱え込むタイプだ。校長になった今でも、「自分でやる方が早い。」「自分の思うとおりに仕上げたい。」なんて思ってしまうことがある。でも、人に任せることは、効率的に仕事を進めるため、ミスを減らすため、また、後進を育てるため、とても大切だと知った。今は、自分のことを棚に上げて、「一人で抱えず、人に任せましょう。」と運営委員の先生方に呼び掛けている。

いつも「大丈夫」と言ってくれて心強かった（担当係長時代、指導主事から）

あまり自覚していなかったけれど、相談に乗ったり失敗の報告を受けたりしたとき、私は「大丈夫、大丈夫。」と言うようだ。それはきっと、後輩を励ますためというより、自分に言い聞かせているんじゃないかなと思う。人間の脳は、口に出した言葉を信じるようにできているらしい。「大丈夫、大丈夫。」と繰り返していれば、きっと乗り越えられると信じよう。

教頭先生が職員室にいるだけで安心します（教頭時代、部主事から）

「教頭は職員室の番人」なんて言うけれど、見張っているんじゃなくて、安心してもらえるための番人なら、いっかぁ。素直にうれしかった。管理職の仕事で大切なのは、

やっぱり先生たちを守ることなんだな。

憧れます（教頭を離任するとき、先生方から）

御餞別のメッセージに「教頭先生は私の憧れです。」とたくさんの人が書いてくれて、ものすごくびっくりした。「松本教頭」は、優しくて大らかで頼りになる人だったらしい。それは、私そのものではなくて、教頭という立場がそうさせたのだと思うけれど、それでもうれしかった。…でも、私に憧れて管理職選考試験を受けようする人は誰もいなかった。

示達が聞けなくなるのが残念です（校長を離任するとき、先生方から）

職員会議の示達は、いつも悩んだ。それは、先輩の校長先生から、校長の言葉が教職員の心を変えることがあると学んだから。また、新任校長研修で、高校教育課長から「校長の言葉は重いんですよ。」と教わったから。今、先生たちに何を話すべきか、いつも一生懸命考えた。それをどんな言葉で伝えればいいか、頭をひねった。だから、「示達を楽しみにしていた。」という言葉をもらったとき、本当にうれしかった。大抵は、「校長の話、はよ終わらんかな。」と思われているだろうに…。「こんなありがたいことを言ってもらえる校長おる？」と小躍りした。

難しい仕事もたくさんしたし、悩んだことは数えきれないほどあった。でも、置かれた立場が私を育ててくれたとつくづく思う。そう言えば、私が指導主事として頑張っていた頃、新採時代の上司が「あんた、普通の子やったけどなぁ。」とポツリと言った。「普通の子」とは「何の取り柄もない子」の意味だと捉えている。この「あんた、普通の子やったけどなぁ。」が、もともとの私を一番言い当てていると思う。私はまさしく「普通の子」だ。普通の子の私が指導主事になり、教頭になり、校長になって、仕事を任せてもらったおかげで成長できたのだと心から感謝している。自分で言うのもなんだけど、「松本係長」は強い人だったし、「松本教頭」は優しい人だった。若い頃の望みのまま「いち担任」でいたら絶対経験できないことに、たくさんチャレンジさせてもらった。「松本課長」は、たくさんの夢を描いた。叶ったことも叶わなかったこともあるけれど、あとは次の世代にバトンを託そう。

最後に、一番感謝しているのはもちろん、子どもたちと保護者の方々との出会いである。可愛くて個性的な子どもたちから多くのことを学ばせていただいた。子どもたちとのエピソードは書ききれない。たくさん笑い、たくさん怒り、時には泣いた。保護者の方と一緒に悩み、考え、喜びを共にした。特別支援学校の教員は、とても大変だけれど、本当に面白い仕事だ。

たくさんの出会いに感謝し、幸せな教員生活だったと振り返りながら、筆を置こう。